

---

# BRアナザー

サバイバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BRアナザー

### 【Nコード】

N5777F

### 【作者名】

サバイバー

### 【あらすじ】

何事もなく平和な筈だった四賀乃崎中学校3年A組の修学旅行その平和は一瞬にして、疑心と狂気に満ちた凄惨な「地獄」へと変貌する。繰り返される悲劇の中、彼らは何を思い、何を行うか……。今此処に始まる、新たなバトル・ロワイアル。この駄文には凄惨な描写やグロテスクな描写が多数登場しますので、そういった物が苦手な方はブラウザのバックボタンをクリックして下さい。

## 第零話

小説本編に入る前に、生徒やルール等、諸々の説明をさせて頂きま  
す。

### 四賀乃崎中学校3年A組

男子

安島勇

1番

有杉香奈

女子

猪田賢

2番

井上万希子

今川春哉

3番

上野愛華

薄菜和喜

4番

宇田菜月

江島圭助

5番

江崎楓

大中有史

6番

小野美奈

大野竜彦

7番

尾山光江

鹿賀中響

8番

鹿野幸江

木村博

9番

茅名淳子

葛嶋春雄

10番

九菜明子

剣崎和弘

11番

慶野優実

笹垣健二 12番 小宮山咲

須藤晴治 13番 信楽礼子

仲島賢吾 14番 園田裕子

野田秀哉 15番 沼淵泉

広川斎 16番 深野絵美

落竹優斗 17番 飛高歩

頼付圭人 18番 真中奈津子

間宮哲史 19番 武藤和恵

元中悟史 20番 目黒百合

八島俊次 21番 吉川蘭

ルール

舞台は夏賀島と呼ばれる小島。

タイムリミットは三日間。

他人の武器やデイパックを奪う、民家等の施設に入り物質を調達する等は可能。また、私物を武器として利用するのも可能。

エリアは縦A〜J、横1〜10の百のエリアに区切られている。

禁止エリアが存在し、禁止エリアは生徒が全員出た後の政府関係者が居る建物半径200M、後は午前0時と6時、午後0時と6時に発表されるエリアが禁止区域となる。

禁止区域はコンピューターがランダムに選択し、放送から1時間後、3時間後、5時間後の順に、発表されたエリアが禁止区域となる。

禁止区域に立ち入ると首輪（ガダルカナル22号）が爆発する。また、不法脱出しようとした場合も同様

三日以内に生き残りが二人以上居た場合、全員の首輪が爆発する。

最後生き残った一名のみ、家に帰る事が出来る。

デイパックの中身は食料1日分 水の入ったペットボトル×3 エリアの地図 懐中電灯 方位磁針 武器

武器はアタリはマシンガンやショットガン等からハズレはメリケンサックや+ドライバー等までピンからキリまで有り、どの武器が手に入るかは運次第。

以上は本作品のルールです。

基本的に主人公は決まっていけないので、どのキャラクターを主人公と見るかは、皆様の自由な判断にお任せします

それでは、ごゆっくりと

「ゲーム」をお楽しみ下さい・・・。

## 第巻話

四賀乃崎中学校3年A組、修学旅行バスの中……。

本来の目的は学習に有るが、旅行と名の付く物故か、生徒達は皆思い思いにはしゃぎまわる。

「百合い〜！！あつちに着いたら、一緒に記念撮影しよ〜！！」短い黒髪の女子生徒、小宮山咲が後ろの席の女子生徒の方に振り返ってそう言う。

「ん、オツケーオツケー！万事オツケーだよ！」ショートカットの黒髪の女子生徒、目黒百合は話し掛けて来た少女にそう返す。

「なあカズウ。もしこのバスがBR行きのバスだったらどうするう？」比較的すっきりした顔立ちの男子生徒、落竹優斗が、へらへらしながら隣の席に座る男子生徒に問い掛ける。

「BR？無い無い。だって宝くじに当たるよか難いんだろ？んなもんにオレらがヒットする訳ねえだろ、ユウ」

目鼻立ちのすっきりした男子生徒、剣崎和弘は半ば呆れたような表情を浮かべながら優斗にそう言う。

「ははっ、そ〜だよなっ。んなもんに当たる位に当たる位なら宝くじに当てて下さいよ神様っ、てな話だよなあ。でもさっ、マジでBRだったら、お前ならどうするよ？やっば誰も殺さない？」

「ん〜？お前殺すんじゃない」

「ちよっ、おまつ、冗談きついつて」

次いで、二人の内にははは、と言う自然な笑いが起こる。

「けえくんごっ。何聞いてんのっ？」漆黒のポニーテールの女子生徒、吉川蘭が前の席の背凭れに凭れながら、前の席に座るヘッドフォンを掛けた男子生徒に問い掛ける。

「あん？何でも良いじゃんかよお」ヘッドフォンを掛けた金髪の男子生徒、仲島賢吾は、ヘッドフォンを外しながら気怠げに蘭にそう返す。

「何か冷たあゝい・・・賢吾あたしの事嫌いになっちゃった・・・？」蘭は半泣きのような顔になりながら賢吾にそう問う

「はっ！？なっ！？はあっ！！？何でそうなんだよっ！！！？」

「なんてうっそあゝど？あたしの演技上手かった？」

「・・・お前なあ・・・」

「ヒヤヒヤヒヤ、ホントにお二人はお熱いですな」賢吾の隣の席に座る赤茶けた長髪の男子生徒、頼付圭人が、ニヤニヤと笑いながら賢吾と蘭にそう言う。

「圭人おゝ！！お前は余計な口挟むなっつの！！！つかニヤけんな！！！！」

「ヒヤヒヤヒヤ、そう怒りなさんなっ。傍目から見ても、ラブラブ

カップルだぜ、お前らはっ」

「ほらっ、ねっ？あたし達はクラス公認のカップルなんだから、もうちょっとあからさまに一緒に居ても良くない？」

「・・・勝手に言ってる」顔面を真っ赤にしながら賢吾は再びヘッドフォンを耳に押し当てる。

「おい、あれ何だ？」黒淵の眼鏡を掛けた男子生徒、薄菜和喜は顎で窓の外をしゃくりながらそう言う。

その先には、武装した兵士やバギーが並んでいる。

「あ？近くに軍隊の訓練場でも有るんじゃないの？」黒いドレッドヘアの男子生徒、鹿賀中響が言う。

「ん、でもこの界隈に訓練場なんて有ったっけか？」黒髪を角刈りにした男子生徒、須藤春治が言う。

「・・・有ったんじゃない？どうせ俺らろくすっぽ調べちゃ居ねえし。俺らの宿に爆弾とか砲弾とか飛んで来なきゃ関係無いっしょ」

和喜がそう言うと、二人も、んだな、と言って窓から視線を外す。

「先生、どうかしました？」ウェーブ掛かった長い茶髪の女子生徒、信楽礼子は、窓の外に視線を向けたままの担任の教師にそう問い掛ける。

「あ、いや、何でも無いよ」黒い髪の中にちらほらと白い物が混じる男性、国永信雄はそう言った後、窓から視線を反らす。



「ほおくら、次先生の番だよっ」黒いストレートヘアの少女、上野愛華はそう言っつて国永の前にトランプを突き出す。

「ん・・・じゃこれかな・・・つちゃく、ジョーカーかあ」

「先生どおくんまい。てか先生つてさつきからジョーカー引いてばつかじゃ有りませんか？」赤っぱいショートボブの生徒、武藤和恵は悪戯めいた笑みを浮かべながらそう言っつ。

「あゝ、確かにねえ。俺つてツイてないのかもな」

「そおくんな事無いですよっ。ほら、次和恵が先生の引く番だよ」

「あつゝ、どうかジョーカー引きませんようにっ」和恵はそう言っつて国永の持つトランプの一枚を引き抜き恐る恐る見た後、良し！！と小さくガッツポーズを取る。

そうこうしている内にバスはトンネルの中に入り、それと同時に生徒達は示し合わせたかのように全員が眠りに付く。

・・・これから始まる惨劇など微塵も知る由も無く・・・。

「・・・っ、ん。此処何処だ？」最初に目を覚ましたのは、黒いシヤギーカットの男子生徒、木村博だった。

辺りを見回すと、そこはどうやら学校のような場所。

尤も、随所に古ぼけた様子が見られ、間違いなく宿に付いた訳では無いと言うのは、火を見るよりも明らかである。

「おい、起きろよ賢！！賢！！」異様な雰囲気を感じた博は自分の隣で未だ眠り続ける男子生徒の体を揺する。

「んあ？・・・宿に付いたのか？」黒い短髪の男子生徒、猪田賢は寝ぼけ眼を摩りながら博に問い掛ける。

「違えよ！！・・・って何だよ、それ・・・？」博は賢の首を指差しながらそう言う。

否、正確には首に付けられた銀色の首輪を差してと言う可きか。

「お前も・・・何だそれ・・・？」賢が恐る恐る指を差した先には、同様に銀色の首輪が付けられていた。

他にもちらほらと生徒達は目を覚まし、同じように首に付けられた異様な首輪に気付く。

「・・・おい、カズ、これってまさかよ・・・？」優斗は恐怖からか小刻みに体を震わせながら和弘に問い掛ける。

「んな事が有り得て溜まるかよ！！でも・・・これは・・・この状況は・・・間違いねえよ・・・」

他にも思い当たる節を見つけた生徒達が騒ぎ出す。

その中には数名、既に目つきが変わった者も居た。

さながら今から行われるゲームに対して恐怖を持たず、寧ろ積極的にゲームに乗ろう、そう考えているかのような目つきの者が……。

「はい皆さあ〜ん、静粛に〜!!!」一人の人物がガラガラとドアを開け、手をパンパンと叩きながらそう言う。

それと同時に、生徒達の中に起きていたざわめきも収まる。

「え〜、では自己紹介をさせて頂きましようつ。オレは今回皆さん、四賀乃崎中学校3年A組の担当教官を努める事になりました、岩田龍樹です、よろしくお願いします」軍服を身に纏った黒いオールバックの男性、岩田龍樹がそう言う。

その年齢は、恐らく20代後半辺りだろう。

「国永先生は……国永先生はどうしたんですか?!?!?」銀縁眼鏡を掛けた女子生徒、茅名淳子は声を荒げながら岩田にそう聞く。

「まあまあ、そう怒鳴らない。諸君の担任だった国永先生についてだが……おい」

岩田がそう言っパチンと指を鳴らすと共に、二人の軍人が、シートで覆われたキャスター付きのベッドを教室の中に入れる。

「親愛なる国永先生は、諸君がこのゲームの参加者になる事を最後

の最後まで断固として拒否していらっしやっただ。いやはや、芯のお強い人だったよ」

「……それで……先生は……？」

淳子が恐る恐る聞くと、岩田はまあまあと淳子を宥める。

「まあ、プログラムは選ばれた不可避の事項だからね。国永先生にゲームを拒否する人には、不本意ながらこうなって貰うしかなかったよ」

岩田がそうシートを剥ぐと、そこには変わり果てた国永の死体が横たえられていた。

それを見た生徒達の間悲鳴とも絶叫とも付かない物が起こる。

「はい煩いぞお前らあ」

岩田がそう言うのと回りに控えていた兵士達が天井に向かって銃を乱射し。

銃声を聞いた生徒達の中に起こっていた悲鳴は自ずと収まる。

「うん、諸君は聞き分けが良いみたいだね。安心したよ、諸君が反抗的な子達ばかりだったら、私は諸君を射殺しなきゃいけなかったよ」

その言葉を聞いた生徒達はビクツと肩を動かす。

「賢明なる諸君はこれが何か知っているとと思うが、念の為説明しよ

う。この日本国はすっかり駄目んなつちやつたんだな、うん。だから、厳正な抽選の結果選ばれた中学3年生の1クラスに、三日間掛けて殺し合つて貰おうつて話になった訳よ。あ、勿論諸君の親御さんには連絡入れて有るから何の気兼ねも無く殺し合つてくれて構わないよ」

そう言つて岩田はチョークを手に取り、黒板に二文字のアルファベツトを書き込む、

「この法律考えた議員さんは天才だよな。諸君もそう思わんか？」

岩田は生徒達に問い掛けるが、誰一人として声を上げない。

「そういうノーリアクションはオレはあまり好きじゃないけどな・  
・まあ良いや。この法律を聞いた元レスラーの議員が思わず叫んだ一言からこの名前が付いた」

岩田はそう言つて黒板に書かれた文字を手で強く叩き付け、高らかにそう言う。

「バトル・ロワイアル!!!」

## 第貳話

「・・・バトル・・・ロワイアル・・・」

誰ともなくそう呟く。

最も認めたくなかった、最悪の現実を・・・。

「うむ、復唱すると言つのは素晴らしい！！言われた事を理解するのにこの上なく有効な方法だからな！！ではルール説明に入るうか！！！」

龍樹がそう言うと共に、二人の軍人が黒板に大きめの地図を貼り付ける。

「はい！！諸君が今居るのは夏賀島と言う小さな島だ！！このプログラムの開催に当たって、島民達は一時退去してくれてるから、遠慮は要らないぞ！！」

龍樹は次いで、黒板に貼られた地図を掌で強く叩き付ける。

「さて、重用なのは此処から！！この島は今から1000のエリアに分断される！！縦A〜J、横1〜10と言った安梅にな！！君達にはこのエリアの中で三日間、殺し合って貰ううっ！！」

「ざけんなよ！！何で俺らが殺し合いなんかしなきゃいけないんだよ！！！」茶色い長髪の男子生徒、元中悟史が一步前に出ながらそう怒鳴る。

「それは厳正なる抽選の結果。こればかりは運だから、諦めてくれ。それと、目上の人間に対してタメ口は良く無いな。もし次にタメ口を吐いたりしたら、君達も国永先生と同じようになって貰うからなあ」

間延びした言い方だがその言葉に込められた威圧感に気圧されたのか、悟史は後ろに下がる。

「よし、じゃあルール説明を続けるぞ。この三日間の中で、エリアによつては禁止エリアに設定される場所が出て来る。禁止エリアの発表は、午前零時と六時、午後零時と六時の四回で発表される。禁止エリアになる順は、発表された時間から一時間後、三時間後、五時間後の順番だ。もし発表された禁止エリアに居たら、さっさとそのエリアを離れる。さもなければ諸君の首に付けられた首輪が、ドカーン！と爆発するぞお。因みに、不法脱出しようとした場合も同様だ」

その言葉を聞いた瞬間、何人かの生徒が僅かに後ろに下がる。既に知っていた事とは言え、やはり衝撃の有る事なのだろう。

「それと、諸君の中での最後の生徒、このクラスでは吉川さんだな、彼女がこの教室を出た後暫くしたらこっから半径200M圏内は禁止エリアになつからな、良く覚えとけよお。それでは次の説明だ。おい、持って来い」

龍樹が教室の外に向けてそう言うと、新たに二人の兵士が、デイパツクのぶら下げられたキャスター付きの物を教室の中に運び込む。

そして兵士の一人は予め手にしていたデイパツクを龍樹に渡す。

「はい御苦労。の中には、食料、水の入ったペットボトル、この島の地図、懐中電灯、方位磁針、それとランダムに選ばれた武器が入ってる」

龍樹は受け取ったデイパックを高らかに掲げながらそう言う。

「このデイパックは皆に一つずつ支給してやる、武器は何が入ってるかは開けてからのお楽しみだ。因みにこのデイパックの中身は・  
」

龍樹はそう言うで大袈裟な仕種でデイパックの中を漁り、中に入っていた物を取り出す。

「はっはっはっ、この中はピコピコハンマーみたいだな。皆このデイパックを貰わなくて良かったなあ」

そう言うって龍樹は豪快に笑うが、誰一人笑って居ない事に気付くと、笑うのを止める。

「・・・全く、お前らも少しは乗れよなあ。もしかしたらもう笑えなくなっちまうかも知れないんだからなあ」

そう言うってやはり誰一人として笑う者は無く。

龍樹は大きく溜息を一つ吐く。

「武器にアタリハズレが有るのは、体格差とかの事を考慮した上で、ゲームを悪魔でも公正公平に行う為の事だ。だからどんな武器が当たっても文句垂れんなよ」。はい、此処までの段階で質問が有る奴居るかあ〜?」



龍樹が問の抜けた声でそう聞くと、一人の生徒が怖ず怖ずと手を挙げる。

「あの・・・生き残ったら家に帰れるんですね・・・？」天パ気味の黒髪の男子生徒、今川春哉は恐る恐ると言った様子でそう聞く。

「お！君はやる気なのかな？つとと、疑問系に疑問系で返しちゃいけないよな。よし、質問に答えよう。最後の一人になったら家に帰して上げよう。その上、一生の生活を政府が保証する。仮に職にあぶれても裕福な生活が出来るんだ。命を賭けるに値するだろう？他に質問の有る者は？」

龍樹がそう言っても一向に手を上げる気配も無く。

暫くした後龍樹はよし、と言って話を切り出す。

「ではルール説明を続けるぞ。この島に民家は勿論、ホテルやレストラン、病院やスーパーと言った設備が随所に有る。そう言った所に有る物は君達が自由に使って良いし、休息を取るのも構わん。自由に使って良いと言うのは、つまり包丁とかメスとかみたいなのを拝借して武器にしても良いって事な。それにレストランやスーパーに有る物を勝手に取って飲み食いするのも許す！！そこら辺は君らが判断してくれ！！そして、これが一番重要なんだが、もし三日間の後に生き残りが複数名居た場合は諸君達全員の首輪が爆発して、全員ゲームオーバー。無論、その場合は優勝者無しだ！！まっ、そう言った事例は過去にも滅多に無いがな。今大会では、そんなつまらん事が起こったりしないように、精一杯殺し合ってくれ給え！！！此処までで質問の有る生徒は？」

龍樹のその質問にも誰も答えようとしない。

「質問は無しだな。じゃあ最後のルールの説明だ。皆も知ってる、これは殺し合いだ。故に、死人が出て貰わなきゃ困る。なんで最初の死者が出てから二十四時間以内に次の死者が出なかった場合、皆の首輪が爆発するようになってる。因みに、ゲーム開始から二十四時間以内に死者が出なかった場合も同じだからなあ。よし、そんじゃあ今から名前呼ぶからな!!! 名前呼ばれた生徒は、元気一杯返事をしてくれ!!!」

そう言つて龍樹は机上に置かれた名簿を手に取り、そこに書かれた名前を読み上げる。

「男子一番!!! 安島勇君!!!」

「は、はい!!!」茶色い長髪の男子生徒、安島勇は声を裏返らせながらも前に出てデイパックを受け取り、教室の外に出る。

「女子一番!!! 有杉香奈さん!!!」

「はい」金のツインテールの女子生徒、有杉香奈は小さく返事をした後、前に出てデイパックを受け取り、教室を出る。

「男子二番!!! 猪田賢君!!!」

「はい!!!」賢はそう返事した後、前に出てデイパックを受け取り、生徒達を振り向きガッツポーズをした後、教室を出る。

「女子二番!!! 井上万希子さん!!!」

「・・・チツ」赤い長髪の女子生徒、井上万希子は小さく舌打ちをした後前に出てデイパックを受け取り、龍樹を一睨みした後教室を

出る。

「ああいう反抗的なのはあんまり関心出来ないなあ。じゃあ次、男子三番！！今川春哉君！！」

「は、はい・・・」春哉は震えながら小さく返事をした後前に出て、デイパックを受け取り、教室を出る。

「女子三番！！上野愛華さん！！」

「は・・・はい！！」愛華は動揺気味に返事をした後走って前に出て、デイパックを受け取り、そのまま教室の外に駆け出る。

「男子四番！！薄菜和喜君！！」

「はい」和喜は小さく返事をした後、前に出て、デイパックを受け取り、教室を出る。

「女子四番！！宇田菜月さん！！」

「はいはい」黒いショートカットの女子生徒、宇田菜月は気怠げに返事をした後前に出て、デイパックを受け取り、教室を出る。

「男子五番！！江島圭介君！！」

「はあゝい」ボサボサの黒髪の男子生徒、江島圭介は間の抜けた返事をした後前に出て、デイパックを受け取り、教室を出る。

「女子五番！！江崎楓さん！！」

「は、はい!!」赤毛の短髪の少女、江崎楓はそう返事をした後前に出てデイパックを受け取り、走って教室を出る。

「男子六番!!大中有史君!!」

「・・・はいよ」黒のオールバックの男子生徒、大中有史はそう言っ  
てゆっくりと前に出てデイパックを受け取り、教室を出る。

「女子六番!!小野美奈さん!!」

「はい!!」漆黒の長髪の女子生徒、小野美奈は前に出てデイパッ  
クを受け取り、走って教室を出る。

「男子七番!!大野竜彦君!!」

「へいへい」朱色の短髪の男子生徒、大野竜彦はゆっくりと前に出  
てデイパックを受け取り、ゆっくりと教室を出る。

「女子七番!!尾山光江さん!!」

「は、はい・・・」黒のワンレンの女子生徒、尾山光江は震える声  
で返事をした後デイパックを受け取り、教室を出る。

「男子八番!!鹿賀中響君!!」

「・・・」響は何も答えずに前に出てデイパックを受け取り、それ  
を肩に担ぐようにして教室を出る。

「全く無愛想な奴だなあ・・・。次、女子八番!!鹿野幸江さん!  
」

「はい」カチューシャを付けた黒髪の女子生徒、鹿野幸江は小さく返事をした後前に出てデイパックを受け取り、教室を出る。

「男子九番！！木村博君！！」

「はい！！」博は前に出てデイパックを受け取り、かなりの俊足で教室を出る。

「元気が有ると言うのは良いねえ。女子九番！！茅名淳子さん！！」

「はい」赤い縦ロールの女子生徒、茅名淳子は前に出てデイパックを受け取り、残った生徒に向けて笑みを見せ、教室を出る。

「男子十番！！葛嶋春雄 君！！」

「あいよ」黒いオールバックの少年、葛嶋春雄は欠伸をしながら前に出てデイパックを受け取り、教室を出る。

「女子十番！！九菜明子さん！！」

「はい！！」黒い三つ編みの女子生徒、九菜明子は前に出てデイバックを受け取り、教室を出る。

「男子十一番！！剣崎和弘君！！」

「・・・はい」和弘はそう答えた後、優斗の方を振り返り、一言告げる。

「・・・又後でな」

それに対して優斗が首を縦に振るのを見た和弘は前に出てデイパツクを受け取り、猛ダツシユで教室を出る。

・・・恐怖のゲームの会場に向けて、少年は走り出した・・・。

## 第貳話（後書き）

当方は和弘主点で描いて行く気なので、その点はご理解下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5777f/>

---

BRアナザー

2010年10月20日14時50分発行